郷土への扉
The gateway to local history

神社建築の屋根（鹿児島神宮本殿）

県の有形文化財（建造物）に指定されている鹿児島神宮本殿・拝殿、勅使殿。現在、本殿屋根の檜皮のふき替え工事を行っています。今回は、神社建築と鹿児島神宮の屋根について紹介します。

屋根材の違い

檜皮葺の建物は県内では唯一で、本殿の大きさは県内最大。九州では太宰府天満宮に次いで、2番目の大きさといわれます。

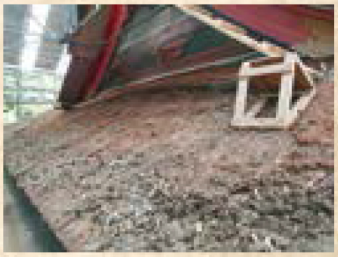
檜皮とは文字どおり檜の皮のことです。奈良時代の高級な住宅に用いられていて、古くからある建築物の中で最高級とされます。曲面を表現しやすく軽量であるため、見た目に美しく建物への負担も抑えられます。一方で耐久性が低く、30年から40年でふき替える必要があります。

神社に使われる屋根材として、奈良時代より古いものでは、茅葺が挙げられます。伊勢神宮は今でもその伝統を受け継ぎ、屋根は茅葺です。ほかには小さな木の板を使用する柿葺、新しいものでは銅板葺などがあります。地域の神社では瓦葺が使われる場合がありますが、基本的に瓦は寺院建築に使われるもので、神社建築に使われるようになったのは、明治時代以降といわれます。

鹿児島神宮の屋根

鹿児島神宮の建物は宝暦6（1756）年、薩摩藩主・島津重豪の時代に竣工しました。その前の建物は慶長6（1601）年、島津義久によって建てられたもので、現在の建物とほぼ同規模のものだったという記録があります。義久が造った建物の屋根は小板葺（柿葺）と記されており、檜皮葺ではなかったと考えられますが、いつから檜皮葺になったのかは分かっていません。

宝暦の造営当初の図面は残っておらず、檜皮葺であったかどうか定かではありません。前述のとおり、本殿はかなりの大きさであり、使用する檜皮の量も多くなります。檜皮は主に寒い地方で採れるため、材料を確保するのは非常に難しかったのではないかと想像されます。昭和3（1928）年に本殿改修を行った際の屋根は、檜皮葺でした。隼人歴史民俗資料館に、その時に撮影された写真が残っています。


老朽化した檜皮葺の屋根

ふき替え途中の屋根

檜皮葺の職人たち。用水路には檜皮の束（昭和3年）

現在、工事をしている屋根の様子を見ると、職人の技術の高さに驚かされます。木材はきれいな曲線に加工され、檜皮は竹くぎで整然と葺かれています。特に軒はきれいに切りそろえられ、その見事さに圧倒されます。

年末には足場がとれる予定ですので新しくなった屋根に注目してください。工事完成後には見学会も予定していますので、ぜひご参加ください。

（文責＝坂元）

鹿児島神宮本殿・屋根改修工事完成見学会を行います。

- 期日＝11月27日(土)・28日(日)
- 時間＝①午前11時から、②午後1時から、③午後2時から、④午後3時から
※受付は各15分前から。
- 対象＝小学5年生以上(小学生は保護者同伴)
- 定員＝各回10人
※申し込み多数の場合は抽選。
- 参加料＝無料
- 申込方法＝市ホームページからか、往復はがきに住所、氏名(2人まで)、電話番号、希望日時(第3希望まで)を記入の上、郵送
- 申込期限＝11月19日(金)午後5時必着

問＝社会教育課　☎(64)0708

※新型コロナウイルス感染拡大の状況によって、中止することがあります。